〈隔離〉に抗う実践としての〈社会復帰〉

——ハンセン病療養所退所者の生活世界——

‘Return to Society’ as Practical Resistance to ‘Isolation’:
Life-worlds of People Who Left the Hansen’s Disease Sanatorium

坂 田 勝 彦
SAKATA Katsuhiko

Beginning in the modern era as part of the process of national state formation, the Japanese government adopted an isolation policy for people with Hansen’s disease in which sufferers were segregated from the general public and confined to sanatoria. This isolation policy was in effect for a century, ending only recently in 1996.

Meanwhile, in post-war Japan, there were some who left the sanatorium. This article examines the experience of Hansen’s disease sufferers who left the sanatorium, in order to explore how they constructed plural life-worlds through resisting ‘isolation’. ‘Return to society’ for the sufferers meant that they tried to build several relationships and selves outside the sanatorium.

1. 問題の所在

(1) 療養所退所者という存在を巡って

1909 年施行の「癩予防ニ関スル件」を端緒に、日本においては近代以降の国民国家の形成過程を通して、ハンセン病に罹患した者を他の健康者と弁別し、療養所へ終生隔離することを目的とするハンセン病政策が形成された。特に 1930 年代以降に展開された「無らい県運動」と呼ばれる官民合同の隔離収容政策を通して、この病いを患う者の社会からの排除と療養所への隔離収容が進められた。そして、隔離政策は戦後に新薬プロミンが登場した後も、1996 年の「らい予防法」の改正・廃止まで続けられた。

だが隔離政策が近年まで続けられた一方で、1950 年代後半以降、ハンセン病患者⁽¹⁾を巡る状況には様々な変化が現れた。特に、療養所を退所し、彼らが語るところの「社会」で生きるという選択／生活が、療養所入所者に戦後という新たな時代の希望として議論された。

例えば、ある入所者は当時の雰囲気を書き記している。

精神的にも物質的にも、低迷状態が続けてきた療養所の中に、唯一の希望の芽生えが出てきました。それは「社会復帰」という問題です……ハ氏病療養所（ハンセン病療養所：引用者注）は今「転換期」に直面しているといわれていますが、この「転換期」という言葉がわたしたち療養者に、なにか未来的な明るさを感じさせるのは、依然として過去の暗さを多く抱えているからでしょうか。
[多磨全生園入所者自治会機関誌『多磨』1957.4:35]

ハンセン病患者を巡る変化にはまず、新薬の登場と新憲法の公布が大きな影響を与えていた。それまで有効な治療法が確立されず、この病いは病者をはじめ、多くの人々に不治の病として恐れられていた。だが、新薬によって医学的にはこの病気が治癒することが明らかになり、また日本国憲法のもとで療養所入所者にも選挙権などの公民権が保障された状

況を背景に、ハンセン病者は彼らの終生隔離を目的とする隔離政策に異議申し立ての運動を展開した⁽²⁾。その結果、隔離政策は廃止されなかったものの、厚生省は療養所入所者の退所を非公式に認めた「軽快退所」通達（1956年）を出すことになった。根強い差別が残り、退所への支援などは未整備の状況だったが、東京オリンピックを前にした好景気のもと、比較的若く病気の後遺症の軽かった入所者のなかからは、多い年で総計100名以上の人々が療養所を退所した〔全国ハンセン氏病患者協議会編1977:140〕⁽³⁾。

（2）分析視角——〈隔離〉に抗う実践としての〈社会復帰〉

療養所退所者の経験については、彼らへの調査が困難であることと相まって、隔離政策の形成過程の歴史的検証や療養所入所者へのインタビュー調査と比べ、研究は進んでいないが、これまでに行われた貴重な試みに蘭の論考がある〔蘭2004a:197-251〕。この病いへの根強い差別のなか、ハンセン病者がいかなる意味世界を生きてきたか検討する蘭は、退所者が行ってきた病い（を患った過去や後遺症）を隠す試みに着目する。ハンセン病者の隔離収容を明記した「らい予防法」が存在したため、特に病歴は退所者に重大な問題となっていた。蘭は、病歴をいかに隠すことができるかが彼らの生活に大きな影響を与えてきたことを詳細に明らかにした。

だが、困難な状況があったにもかかわらず、なぜ彼らはあえて療養所から退所することを選択し、「社会」で生きることになったのだろうか。この疑問を考えるには、以下で明らかになるように、彼らが遂行してきた〈隔離〉に抗う実践という視角が重要になる。

ハンセン病療養所では、施設が要請する被収容者像へ入所者を誘導する様々な管理・統制が行われた。まず隔離収容の際、病者の住居の焼き払いや公衆の面前での本人・家族への消毒措置等を通して、ハンセン病者は家族や職場など、それまで生きてきた関係性を剥奪された。また入所後、彼らには施設管理者によって、「懲戒検束権」と呼ばれる懲罰権に基づく制裁や優生手術等が行われた〔青山2005; 宮坂2006〕。これらの管理・統制は入所者を“療養所で生を全うすべき存在”という自己了解へ誘導した〔坂田2007〕。

しかし他方で、入所者は日々の営みのなかで上記の管理・統制に回収されない関係性や自己を模索した。予算の絶対的な不足や施設管理者による管理・統制のもと、療養所では長らく衣食住全般を入所者が自らの手で築き上げることを余儀なくされた。そのため、食料の生産や住居の建築、重病者の介護など、生活全般を入所者は文字通り何もない状態から自活したが、これら生活の営みを通して彼らは、様々な規制を受けながらではあったが、自律性の確保を試みた〔多磨全生園患者自治会編1979など〕⁽⁴⁾。

ひるがえって、療養所退所者が行ってきた病歴を隠す試みに目を向けると、彼らは差別を回避するために病歴を隠した際のことを振り返るとき、自身がまるで「前科」を背負う存在であるかのように感じたと言及する⁽⁵⁾。また次節以降で検討するように、彼らは自らの経験を振り返る際、病歴が常に隠すべき事情として重くのしかかってきたと吐露する。ある病歴をたえず「前科」のように感じたという彼らの経験からは、退所者に自らが“療養所で生を全うすべき存在”であることを想起させる自己了解の問題が明らかになる。つまり、入所者の日常に現れた困難——生活世界を侵襲し、療養所へ彼らを位置づける自己了解の機制——と同型の問題が、退所者の日常にも現れたことが推察される。ハンセン病問題に関する既存研究は無論、隔離政策の下で行われた隔離の問題を認識していた〔蘭

2004b; 武田 1997 → 2005]。だが、ハンセン病者に対する隔離を伝染病者やその恐れがある者に対する特定区画への収容という医学的措置として定義する成田（多磨全生園元園長）の理解〔成田 2004〕に代表される従来の研究は、医学的措置のみならず、それに付随する管理・統制が総体となって、ハンセン病者の生活世界を侵襲したことについては主題的に検討してこなかった。そのため、複数の関係性と自己を生きる経験を阻害する自己了解の機制として、ハンセン病者に対する〈隔離〉が機能したことは十分に論じられていないように思われる。このような〈隔離〉の機能に着目した上で、療養所から退所する選択や「社会」で生きる生活に退所者がいかなる意味を託したか検証する必要がある。

そこで本稿は、ハンセン病者が療養所を退所し、「社会」で生活してきた経験を〈社会復帰〉という言葉で表現する。以下で明らかになるように、彼らにとって〈社会復帰〉とは、「入所以前に元々いた場所へ戻っていく」といった字義通りの「社会復帰」ではなく、むしろ、療養所の内的世界に回収されそうになりながらも、それに収斂しない複数の関係性と自己の構築を試みる実践、つまり〈隔離〉に抗う実践だった。療養所退所者へのインタビュー調査および手記をもとに、本稿はハンセン病者にとって〈社会復帰〉とはいかなる実践として意味づけられてきたか検討する⁽⁶⁾。

2. 〈社会復帰〉という選択／生活に託された意味——希望と困難

(1) 〈社会復帰〉に託された希望

療養所からの退所は戦後、ハンセン病療養所入所者の最も関心を集める問題となったが、その気運を巡ってはある論争が重要な契機となった〔全国ハンセン氏病患者協議会編 1977:137-139〕。以下ではまず、「濫求惰民論」と呼ばれるその論争について検討する。

1956年に岡山県の療養所「邑久光明園」に勤めていたある職員が、「新しき時代の新しきライ療養所」という論考を発表した。その論考は入所者の機関誌、そして社会福祉行政の代表的な学術誌『社会事業』に掲載され（1957年「新しいライ療養所の在り方」）、当時、多くの反響を呼んだ⁽⁷⁾。“ライ（ハンセン病）は既に治る病気になった。治癒した者は病人でないのだから、療養所を退所するべきだ”。新薬の登場や「軽快退所」通達を踏まえ、ハンセン病療養所の再編成を提起したこの論考は、それと合わせて、入所者へ積極的に退所することを促したが、彼らに「惰民」という言葉を投げかけたため、大々的な反発を招いた。だが反発とともに、この論考は入所者に次のような反応で受け止められた。

濫求惰民論のそのような（退所しない入所者を「惰民」と批判する一方で、隔離政策の暴力性が十分に検討されていない：引用者注）不備にもかかわらず、それは千百の抗弁の下からむくむくと起き上がって人の心を打つものがある。なぜだろうか。惰民論の持つ強力なパトスゆえにである。……（濫求惰民論は）患者に対して一個の人間としての責任を追及しているのだ。政策論ではない。鋭い感性のとらえた時代の声であった。〔『多磨』1961.3:56-57〕

“どんな困難があっても、療養所から退所することで、病者でなく、一人の人間として生きることができるはずだ”。この論争からは、入所者に退所が現実的な選択肢として理解されていたこと、またその選択に彼らが抱いた意欲が窺われる。

だが、現実には困難を極めた。まず、彼らが経験した剥奪が問題となった。例えば入所に際し、多くの者は入所の事実によって家族への差別が生じる事態の回避を理由に、施設側から療養所内でのみ通用する園名への改名をなかば強制されたが、そうした過程を通して彼らは入所以前の関係性を切断された。また療養所では園内結婚の条件として優生手術を

受けることが制度化されていたが、それらの管理・統制は入所者を“療養所で生を全うすべき存在”という自己了解へ誘導した〔坂田2007〕。こうした問題は当時、退所の困難として入所者に機関誌などで吐露された⁽⁸⁾。療養所からの退所が現実的な選択肢として浮上する一方で、実際には踏み切ることが困難な状況に彼らは葛藤した。

しかし徐々にではあったが、1950年代後半から60年代にかけて、療養所から退所する人々が現れた。1960年代前半、各療養所の入所者自治会は機関誌で退所をテーマとした記事を編集し、支援を模索したが、それらの企画の一つに、「『座談会』社会復帰者はかく語る」という特集があった。そこでは退所者から退所を検討する入所者に向けて、退所についてある定型的な見解が示されている。

金もなく何もなくてからですね。人生の最初からスタートしなければならない。それと年齢的なハンディキャップがあるわけです。それを克服していくことは並大抵のことではない訳です。

……（また療養所での生活以上に苦労は多いが：引用者注）療養生活での苦労と社会生活での苦労は全く違う。つまり新しい苦労に立ち向かわなければならない訳だ。その新しい苦労ということは非常に有難い事で、また生甲斐でもなからうかと思う。『多磨』1962.7:14]

病気の後遺症に伴う様々な不自由、頼るべき肉親縁者とも隔絶した状況など、長期の療養所生活は退所の可能性を入所者から奪った。ゴフマンは精神病院の入所者が退所に抱く深刻な不安について、入所に伴う「文化剥奪」の影響を指摘する〔Goffman 1960=1984〕。ゴフマンは、施設の外で生きるために必要な文化を剥奪されることで施設入所者が施設から退所する可能性を奪われていることを明らかにした。ハンセン病療養所からの退所を巡っても、文化剥奪は大きな問題となった。だが、彼らは退所を試みた。彼らにとって〈社会復帰〉とは、「新しい苦労の喜び」を得られるもの、つまり、困難な状況に打ち勝つことで療養所での生活や自己とは異なる可能性を生きる選択として理解されたのである。

（2）〈社会復帰〉を巡る困難

1) 病歴を隠す工夫とそのジレンマ

だが、療養所退所者は様々な困難に直面した。まず、ハンセン病に罹った過去をいかに隠すことができるかが、公私において退所者には問題となった。そのため、彼らは様々な工夫を行った。例えば、就労に際して履歴書に病歴を記載しない、あるいは小児麻痺などという形で虚偽の病歴を記載する工夫である。また運送業や土建業など、経歴が問われにくい職業を選択する工夫も行われた。

しかし、そうした工夫をすればするほど、彼らはあるジレンマに陥った。東京オリンピックを目前に控えた1962年に鹿児島県の「星塚敬愛園」を退所したYさん（男性、65歳、1953年入所、1962年退所）は退所後、10種類以上の職業を転職し、現在に至る。これまでの生活について尋ねた際、彼は病歴を隠す困難をこう振り返った。

とにかく耐えられなくて嫌だね……嘘の上塗りを繰り返してね。（色々な場面で）「ちょっと事情があってね」って（言わなければならなかった）……嘘をいうっていうのがね、つねにね、自分の頭にね、ついて回ってきてね。〔Yさんとのインタビューは2007/2/21、3/11、4/20の計3回。いずれもYさんの自宅付近の喫茶店と居酒屋で。その2回目より〕

Yさんは病歴を隠すために嘘をついた際、嘘をつく後ろめたさとともに、自らが他人に隠すべき事情を持つ存在であることを実感したと語る。戦後も「竜田寮児童差別事件」を

はじめ、ハンセン病者や家族への差別事件は後を絶たなかったため〔全国ハンセン氏病患者協議会編 1977: 168-171〕、退所者は病歴を隠して生活することを余儀なくされた。そのたびに彼らは、療養所で生活していた過去を痛感させられるジレンマに直面した⁽⁹⁾。

2) 退所者の直面した困難——療養所を絶えず意識せざるをえないという状況

また、退所者が直面した困難は多岐に渡った。彼らのなかには退所後、手足に後遺症が残る同病者と一緒にいる姿を目撃されることで病歴が露見する可能性を危惧し、互いに療養所外で連絡をとることを控えた人もいた。療養所でともに生活した者と関係を持つことも、退所後、彼らは制限した（せざるをえなかった）⁽¹⁰⁾。

そして退所者には、病歴の露見から結婚の破談や職場での解雇、居住地域の住民による排斥を経験した者も少なくなかった〔伊波 1997; 財団法人日弁連法務研究財団 2005〕⁽¹¹⁾。そうした状況のもと、彼らのなかでは他者と関係を持つことを自制することで病歴の露見を回避する方法も採られた。W さん（65 歳、男性、1960 年入所、1969 年退所）は療養所から退所後、運送業を経てタクシー会社に勤務し、後に個人タクシーとして独立して生計を立てた。彼はタクシー会社に勤務していた頃のことを、こう述懐する。

タクシー会社のときはあんまり、その（同僚と）風呂なんか、いかなかったね、一緒に。あとはね、お酒は飲まないようにしてた。お酒は、病気が騒ぐから。それで（病気の後遺症などが）、ばれると困るから。……それなんかも（宴席などといった機会は）、意識的に避けてた。これは人を避けようとか、ね……（酒席などの機会は気持ちが開放的になって）何をしゃべりだすか分からないから……〔W さんとのインタビューは 2006/6/18 の計 1 回。多磨全生園で。そのインタビューより〕

退所者は病歴を隠して生活することを余儀なくされたが、そうした状況は、彼らが他者と関係を構築する可能性を絶えず縮減した。

また、ハンセン病者の隔離収容を明記した「らい予防法」のもと、ハンセン病に関わる治療は療養所以外の病院では制限されていたため、退所者は病気の後遺症の治療などが必要になった際、療養所を訪ねなければならなかった⁽¹²⁾。彼らはその身体を介して、退所後も療養所に繋ぎとめられた。

そして、療養所を訪れたとき、彼らはある感覚を覚えたという。熊本の「菊地恵楓園」を退所して以来、今日まで運送業を営む K さん（62 歳、男性、1960 年入所、1965 年退所）は、かつて「多磨全生園」を訪ねた際のことを次のように振り返る。

予防法廃止以前はね、その、診察なんかで、時々、全生園に行ってたの。そんなとき、あるの……そんなとき、全生園入っていくときは、人には見られたくないなって、すごく感じた。そういうのがあった。でも、入ると、ホッとするの。なんでかね。他の人（退所者）もね、（その感覚を覚えたことが）あるっていうのね。今はそんなの全然ないんだけど。〔K さんとのインタビューは 2007/4/4、4/18 の計 2 回。首都圏の飲食店。2 回目のインタビュー 2007/4/18 より〕

退所者は、この病いに対する法に根拠付けられた差別に晒される恐れを抱かざるをえない状況で生活した。また、療養所外での治療や診察を制限した医療制度によって、折に触れて療養所を訪ねざるをえなかった彼らは、様々な局面で療養所の存在を意識しなければならなかった。退所者はインタビューや手記で「とにかく出たくて、飛び出した」と退所した当時を振り返る。そして、「ハンセン病のことなんか忘れたくてね、フタしようとした」が、「忘れられなかった」と吐露する。彼らの経験からは、普段生活している場所が

「ホッと」できない場所と感じられる状況があったこと、また一瞬であったとしても、病歴を隠す必要のない療養所が「ホッと」できる場所と感じられることがあった状況が明らかになる。療養所でのものとは異なる生活や自己を生きることを願いながらも、彼らはかつての生活や自己を意識せざるをえない状況に絶えず置かれていたのである。

3. 〈社会復帰〉を通して構築される関係性と自己——ある退所経験者の軌跡

(1) 「社会」へ参入する実践

だが、彼らは「社会」での生活が続けた。以下ではある人物のこれまでの軌跡から、退所者が行ってきた実践と、その実践を通して模索された〈社会復帰〉の意味を検討する。

幼少期に宮城県の「東北新生園」に入所したSさん（62歳、男性、1956年入所、1975年退所）は、岡山県の「長島愛生園」にあった邑久高等学校「新良田教室」⁽¹³⁾を卒業後、園内で結婚した入所者のパートナーと共に退所した。彼は当時を「（都会であれば自分たちの過去を）知ってる人もいないし、出ればなんとかなると思った」と振り返る⁽¹⁴⁾。

若かったからね。自分たちで生きていくんだって。人に食べさせてもらうんじゃなくてね……
20代30代ってときに一生ね、あなた全生園だけですよっていわれたら、納得できますかって……
できないでしょ…… [Sさんとのインタビューは2006/11/3、12/10、12/16、2007/2/17の計4回。
いずれも多磨全生園で。その2回目より]

退所者へのインタビューではこれまでの生活史を伺ったが、彼らは退所の動機とともに、退所後、生計を立てるために就労した仕事について頻繁に言及した。そして多くの場合、それらは彼らが直面した困難として回想された。Sさんも例外ではなかった。

手が悪かったから（病気の後遺症で彼は左手の肘から下が麻痺している）、事務の仕事は難しく
てね……一番初めに働いた工場の仕事はもう……つらかった……（指示が）次から次とやってきて、
もう頭がついていなくて……まったく、手がこうだから手間取るともうどんどん迫ってきて、
もうずっとガタガタ混乱して、頭がまわらなくなって……一日中ずっと（会社の）隅っこの机で…
… [2回目のインタビュー 2006/12/10 より]

退所者はそれまでと異なる世界での生活に戸惑い、まず就労の場で様々なトラブルに直面した。そうしたトラブルのたびにSさんは、療養所での生活と、これから生きていこうとしていた「社会」生活の「違い」を痛感したと振り返る。そして、「療養所にいたとき何か（技能を）覚えとけば（よかった）」、「無駄な時間を過ごしてしまった」と悔やんだという。自身の直面した状況について、療養所で生活した過去に関連づけて解釈せざるをえなかったことを示唆する彼の回想からは、療養所での過去が退所者に「社会」で生きる上で全く役に立たない過去として重くのしかかっていたことが推察される。

だが、Sさんは就労について、ある執念のようなものを口にした。彼はこう続けた。

でも絶対、自分から（仕事を辞めるって）言わないぞって。どこか心に決めてたのがあって……
新生園を出て、もう帰らない、どんなことをしても生きていくんだって。……きっと自分から言わなければ、道は開けるんだってずっと思ってた…… [2回目のインタビュー 2006/12/10 より]

なぜ彼は「自分からは（仕事を辞めるとは）言わない」ことにこだわったのだろうか。退所者はその日常で絶えず、療養所での生活と「社会」での生活の間に感じたギャップに強い不安を覚えざるをえない状況に直面した。Sさんの「自分から（仕事を辞めるとは）言わない」というこだわりは、そうしたギャップに怯えながらも、「社会」で生きていこ

うとする決意の表れだったのではないだろうか。彼のこのこだわりからは、あくまで療養所ではなく「社会」で生きることを模索した退所者の意思が明らかになる。

(2) 構築される関係性と自己

また退所者が就労の経験を語る際、苦労とともに強調されたのが職歴と職歴を通して獲得した技術への自負だった。Sさんはインタビューで、上記の事務職の次に就職したビル管理会社での勤務と、そこで取得したビル管理業務の資格について繰り返して言及した。都市社会学者の西澤は山谷の日雇い労働者等の日常を検討するなかで、肉体以外に何も所有せず都市空間へ投げ出された被差別者が自らの労働や労働を通して培った技法に強いこだわりを持つことについて「人は仕事を通じて、社会のなかに自己を位置づけることができる」と指摘する〔西澤 1995:33〕。Sさんもまた身一つで都市に足を踏み入れた。そして、就労の経験から「社会の仕組みを知ったよ」と振り返る。一人の労働者と認知され、資格を得ることで、彼は「社会」で生きる存在として自らを確認していった。

また彼はインタビューの最中に、生活の折に触れて撮った写真が収められた数冊のアルバムを取り出した。Sさん夫婦は共働きで生計を立てるなか、落ち着くと近所のキリスト教会に通うようになったという。療養所で入信したものの熱心な信者でなかったと語るSさんは、「東京の大都会に（出て）……寂しかったからね……でも（自分たちの病歴を）知ってる人なんていないはずだ」と考え、思い切って教会に足を運んだと振り返る。他者と関係を構築することへの不安と、それでも他者と関係を持ちたい希望が葛藤するなか、信者という共通項への期待をもとに、彼らは病歴を隠しつつ、教会で出会った人々との関係を模索した。そして彼は教会での思い出を振り返るなかで、特にある場面を回想する。

いっやあ、驚いたのが（教会関係者の）赤ちゃんがいるのよ。いっぱい。その、まわりついてくるよ……３ヶ月から２歳までの赤ちゃんがね（いる）ベビークラスというのがあったの。その交わりがね、そうやってあってね……〔4回目のインタビュー 2007/2/17 より〕

Sさんがこの経験を強調したのは訳があった。退所者は彼らが直面した困難な問題として、幼児との接触を避けてしまう感覚を語った。療養所で彼らは周りの入所者に行われた断種手術などを目の当たりにするなかで、自らが他者、特に幼児に恐ろしい病気を伝染させるかもしれない存在であることを刷り込まれた。ある退所者は「悲しい思い出」として、付き合いのできた近所の子どもをあやした際の経験を手記で回想する。彼は、その子を「抱き上げて無造作に頬ずりをした」とき、「はつとし」て「あわてておろし、逃げるように自分のアパートへ飛びこんでしまった」という。そして、こう思い悩んだと記す。

そういう（療養所で身についた児童と接触を避ける：引用者注）習性が長い間、いつの間にか普通性なものとなっていた。それが何気なしにふつと頬ずりした瞬間に蘇ったのである。……「俺は病気が治つたんだ」そのはずであつた。だのにどうして俺はまだ病気のつもりでいるんだ。無惨な敗北感に覆われる。これ程やりきれないものはない。〔『多磨』1962.2.3:4-5〕

Sさんも当初、幼児への忌避感に苛まれたという。だが、偶然に教会でベビークラスのレクリエーションを担当したことを契機に、その感覚は次第に彼のなかで変わっていったという。教会での経験を通してSさんは、自らへの認識を新たなものにした。

そして、教会での経験はSさんのその後の人生に大きな意味を持つことになる。退所から16年後の1991年、Sさんのパートナーは末期ガンに倒れ、急遽、多磨全生園に再入所

することになった。職場はもちろん、教会の関係者にも事情を隠して自宅と職場、全生園を往復する生活をSさんは余儀なくされた。日増しに疲労と焦燥感が募った。そうした状況のなか、二ヶ月以上が経過したある日、自宅に教会の世話役を務めていた方から電話がかかってきたという。「『何かあったんですか』って、『いってください』って、（何度も）促されたんだよ」。やむをえず、彼は自分たちの事情を告げたと振り返る。

（その電話で教会の方はSさんに）「そのね、Sさん、あなたは私たちを心配なさっていらっしゃるみたいですけどね、その、本心ではね、私たちが信用なさっていないのですか」って。「話したらいいじゃないですか」って……「私たちが信用なさっていないんですかって」（言われたよとパートナーに伝えた）…そのね、やっぱり、ハンセン病だったことをいうのはね、ほんと大変なの……よくね、カミングアウトとかいうけれどね、そんなカッコイイもんじゃないの。そりゃ、今の時代だったら、もしかしたら言えるかもしれないけど。[4回目のインタビュー 2007/2/17 より]

数日後、Sさんは教会に集まった関係者にパートナーの病状と、自分たち夫婦がかつてハンセン病に罹患した過去を明かしたという。彼はアルバムに収められた一枚の集合写真を手にとりながら、それから起こったことをこう振り返った。

それこそもう、それから毎日ってくらい（療養所へパートナーをお見舞いに教会で知り合った友人たちが）来てくれた……遠いのね……その、（パートナーが）亡くなる前にね、（多数のお見舞い客と一緒に）撮った（会食会の）写真があるよ……みんな、本当に来てくれたね……変わらなかった、何にも…… [4回目のインタビュー 2007/2/17 より]

Sさんたちはこのとき二つの選択をとりえた。一つは病歴を隠し続けることであり、多くの場合、それまでの生活を放棄することになったが、その選択をした人々は少なくなかった⁽¹⁵⁾。だが、彼らは別の選択をした。上記のように、彼らにとって病歴を明かすことは望んだ選択でも主体的な行為でもなかった。しかし、あえて病歴を打ち明けたSさんたちの選択には重要な意味があった。病歴を打ち明けるに当っては、教会関係者からの働きかけが契機になったことである。その働きかけはSさんに追い詰められていた状況を実感させるとともに、もしかしたら病歴を打ち明けても彼らは自分たちを仲間として変わらずに受け止めてくれるのではないかと予感させたことが推察される。この選択は彼らにとって、療養所でのものとは異なる、退所して以降の生活で模索してきた関係性と自己をкаろうじてであっても維持することを賭した実践だったと考えることができる。

4. おわりに——複数の関係性と自己を生きる

その後、パートナーとの死別のショックから体調を崩し、Sさんは療養所への再入所を余儀なくされ、現在に至っている。彼の再入所の過程とその後からは、退所者が直面してきた困難が改めて確認される。

Sさんは再入所後、勤めていた会社に事情を伝えることなく退職した。教会でとは異なり、会社では病歴を打ち明けることができず退職を余儀なくされた彼の経験からは、退所者に入院可能だった施設が事実上療養所に限られていた医療制度の問題とともに、彼らを拘束した自己了解の問題の根深さが明らかになる。日弁連の「ハンセン病被害実態調査検証事業」報告書によると、退所者の約6割が再入所を経験したと指摘されている[財団法人日弁連法務研究財団 2005 付録]。他の多くの福祉施設には併設されている退所支援の中間施設がハンセン病療養所には未整備だったことなど、退所者の状況は困難なものだった。

そして、インタビューでSさんは当時の日記を手にとりながら、再入所後、自身の「血がライ病（ハンセン病）になってしまう」ように感じ、気がおかしくなりそうになったと述懐する。彼の当時の心境からは、再入所を機に、自己がそれまでと異なる“汚れた血を持つ病者”へ変わってしまうように感じていた恐れが窺われる。だが彼はこう続けた。

今でも（療養所を退所した）16年間のいろんなこと、いっぱい思い出すよ……（退所は）昔だったらもっとすぐ出来たかもしれないけど、今だって1ヶ月あれば（退所は）全然できると思う……ここで生活するほうが（自分には）よっぽど合わないんだから。[2回目のインタビュー 2006/12/10 より]

Sさんは再入所から現在まで、都内の教会へ毎週通う習慣を続けている。また、教会関係者が彼を訪ねに全生園を訪れることもしばしばあるという。療養所に居ることに生きづらさを感じつつも、自らの在り方に大きな意味を見出すSさんの現在は、療養所に位置づけられた関係性と自己とともに、それらに収斂しない、療養所を退所して以降の生活のなかで構築した複数の関係性と自己を彼が生きていることを示している。

以上、本稿はハンセン病者にとって〈社会復帰〉とはいかなる実践であったか検討した。退所者の経験からはまず、彼らにかつて過ごした療養所での生活や自己を想起させ、療養所へ位置づけていく自己了解の問題が明らかになる。また、再入所後のSさんの苦悩から推察されるように、彼らは療養所に戻ったとしても、自己了解の問題に捕らわれることになった。ハンセン病者に対する〈隔離〉は、医学的措置に止まらず、複数の関係性と自己を生きる経験を阻害するものとして機能してきたのである。こうした〈隔離〉の機能に着目することで本稿は、彼らにとって〈社会復帰〉が〈隔離〉に抗う実践、つまり、療養所の内的世界に回収されそうになりながらも、それに収斂しない複数の関係性と自己をなんとか模索していこうとする実践として意味づけられていたことを明らかにした。

そして、ハンセン病者の〈社会復帰〉経験の考察は、施設の内的世界の拘束をいかに相対化できるかが退所者に深刻な問題であったこと、またこの問題は彼らに限らず、他施設の入所者が施設から退所する経験を検討する際にも重要な論点となることを示唆している。

註

- (1) この病いを患った者は医学的に治癒した後も、発病前と異なる生を生きざるをえない状態に置かれている。本稿はそうした状況を勘案し、この呼称を用いる。
- (2) 「らい予防法闘争」という、ハンセン病者が隔離政策の廃止を目指して行った運動を指す。1953年に起こったこの運動はその目的を達成できなかったが、後の療養所の待遇改善などに大きな影響を与えた[全国ハンセン氏病患者協議会編 1977: 45-62]。
- (3) 「軽快退所」通達とは、厚生省が退所について出した通達を指す。マル秘文書で各県の医務部長に出された。この文書には「本準則を定めたことによって積極的に患者の退所を行わせるものでもない」と断り書きがされていたという[武田 1997→2005: 64-65]。「らい予防法」では退所規定が一切設けられていなかったため、療養所によっては菌検査などを行って許可する場合もあったが、公式に制度化された手続きは皆無だった。
- (4) セルトーは、権力機構と人々の日常の実践を「場所」と「空間」の概念で検討した。「場所」とは権力の主体（企業や軍隊等）に規定される領域を指すが、人々はそれらを自らの自律性が確保される「空間」へ編成する実践を行うと、セルトーは指摘した[Certeau 1980=1987]。ハンセン病者も、彼らを「社会」から排除するために設けられた療養所を、日々の営みを通して自律性が確保される空間へ編成することを試みた[坂田 2007]。
- (5) ある退所者は手記でこう綴っている。「ハンセン氏病を病んだという“前科”については、ひどくび

くびくしている。過去の前歴は忘却しようと努力するが、それはたわいもなく、もろくも崩れてしまう。一日一日の仕事の緊張の瞬間を、或いは生活の間隙をぬつて……その時の己が一番みじめなものに思えた」『多磨』1962.2.3:2]。また、彼らは退所後の生活を「更生」と表現することさえあった『多磨』1961.9:30-32 など]。

- (6) 本稿の調査は、2004 年 8 月以降から現在まで多磨全生園と長島愛生園の入所者に行っているものの延長上にある（全生園の入所者の男性 36 名、女性 11 名、愛生園の入所者の男性 14 名、女性 2 名に調査）。療養所からの退所経験については、2006 年 6 月以降、入所者の仲介で続けている。いずれも 1～4 回、男性 11 名、女性 3 名にインタビューした。なおインタビューや手記には今日差別語とされる表現もあるが、資料の意味を汲み取るため、そのままの表現で引用した。説明が必要なものには適宜、() という形で補った。
- (7) まず呂久光明園の入所者自治会機関誌『楓』1956.9:4-14]に掲載され、翌年『社会事業』[森 1957]に掲載された。著者は後に老人福祉の代表的な研究者となる森幹郎だった。
- (8) 退所を巡る療養所生活の影響は入所者の間で盛んに議論された（長島愛生園入所者自治会の機関誌に掲載された患者運動の中心人物による問題提起『愛生』1957.1:57-63]や、栗生楽泉園入所者自治会の機関誌に寄せられた手記『高原』1957.12:2-9]など)。
- (9) 手記『多磨』1961.11:24-26 など]やインタビューではそうしたジレンマが語られた。
- (10) ある者は街中で退所者と鉢合わせた際、思わず顔を伏せた経験を記している[前掲『多磨』1962.2:3]。またインタビューした退所者のなかには、「らい予防法」廃止以前はできるだけ同病者と連絡を控えたと言った人もいた。
- (11) 病歴をカミングアウトした伊波は家族への差別（子どもの保育所への入所の拒否や近隣住民による妻への嫌がらせ）や結婚生活の破綻など様々な困難に直面した。これらの差別が 1970 年代後半にあったものであることは、状況の深刻さを示している[伊波 1997]。
- (12) 法制度上、ハンセン病者は療養所にいることになっていたため、療養所外での治療などは殆ど行われなかった。療養所での外来が始まったのも 1960 年代後半以降である。
- (13) 正式名称を「岡山県立 呂久高等学校 新良田分校」といい、ハンセン病療養所に設けられた定時制の高校を指す。約 300 名の卒業生を輩出し、多くが療養所を退所した。
- (14) S さんは現在まで退所を続けているわけでもなければ、再入所者のモデルケースでもない。だが、以下で明らかになるように、個別性を強く刻印された彼の経験は、その人生の固有性ととも、退所者が行ってきた〈社会復帰〉の核心を反照的に映し出している。ゆえに他の退所者の経験と重ね合わせながら本稿は、その固有性ととも、S さんの経験を通してハンセン病者にとって〈社会復帰〉はいかなる実践だったか検討する。
- (15) 例えば本文中で登場した調査対象者 4 人のうち 3 人（S さん、W さん、Y さんの 3 人）はいずれも、病気の再発や体調不良から、病歴を隠した状態での退職を経験した。

付記

本稿は 2007 年度の関東社会学会における報告を大幅に加筆・修正したものです。また、ハンセン病療養所退所者や入所者への調査をもとに執筆しました。調査にご協力頂きました方々や資料を閲覧させて頂きましたハンセン病図書館に、この場を借りてお礼申し上げます。

文献

『愛生』長島愛生園慰安会（1957.1）。

青山陽子 2005 「『子どもを持つ』ということ——ハンセン病療養所におけるタブー」『現代社会理論研究』15:325-335。

蘭由岐子 2004a 『病いの経験』を聞き取る——ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社。

—— 2004b 「生活史を語ることの困難——あるハンセン病者の語りから」『歴史評論』656:33-43。

Certeau, de Michel 1980 *Art De Faire*, Paris: Union Generale d'Editions. 山田登世子（訳）『日常実践のポイエティック』新曜社 1987。

- Goffman, Erving 1960 *Asylums: essays on the social situation of mental patients and other inmates*: New York: Doubleday & Company Inc. 石黒 毅 (訳) 『アサイラム——施設収容者の日常世界』誠信書房 1984.
- 伊波敏夫 1997 『花に逢わん』岩波書店.
- 『楓』 邑久光明園慰安会 (1956.9).
- 『高原』 栗生楽泉園文化部 (1957.12).
- 宮坂道夫 2006 『ハンセン病——重監房の記録』集英社.
- 森 幹郎 1957 「新しいライ療養所の在り方」『社会事業』40(6): 19-25.
- 成田 稔 2004 「わが国の癩対策における隔離の時代的変遷」『歴史評論』656: 2-19.
- 西澤晃彦 1995 『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィー』彩流社.
- 坂田勝彦 2007 「〈隔離〉を構成する装置とまなざし——戦前期ハンセン病療養所における『作業』制度・『相愛互助』理念・機関誌の位置」『社会学ジャーナル』27: 118-140.
- 武田 徹 1997→2005 『「隔離」という病い——近代日本の医療空間』中央公論新社.
- 多磨全生園患者自治会編 1979 『俱会一処——患者が綴る全生園の七十年』一光社.
- 『多磨』財団法人全生互惠会 (1957.4, 1961.3, 11, 1962.2.3, 7).
- 財団法人日弁連法務研究財団 2005 『ハンセン病被害実態調査検証事業——最終報告書』.
- 全国ハンセン氏病患者協議会編 1977 『全患協運動史——ハンセン氏病患者の闘いの記録』一光社.

(筑波大学大学院人文社会科学研究所・博士課程)